



1941年から1943年まで、
アジア・太平洋戦争下に刊行された
美術雑誌、全76号を復刻
付録として、
『戦時記録版 日本画及工芸』
第一・二輯（1944年2・9月）を収録！

旬刊 美術新報

復刻版

全6巻
付録1
別冊1



◎編・解説Ⅱ飯野正仁
◎推 薦Ⅱ青木 茂
丹尾安典
◎揃定価Ⅱ本体170,000円＋税
◎配 本Ⅱ全2回配本

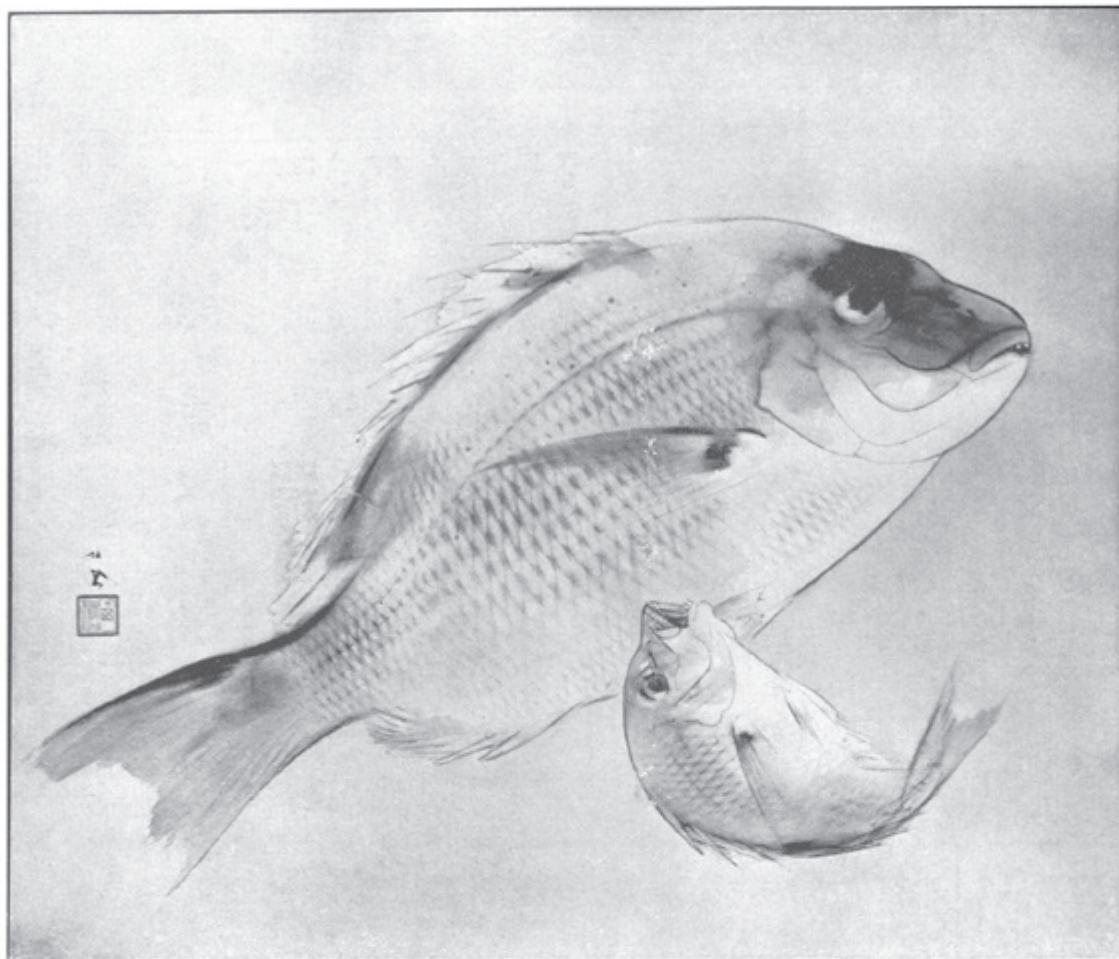


不二出版

日本畫家報國會主催
軍用機献納作品展

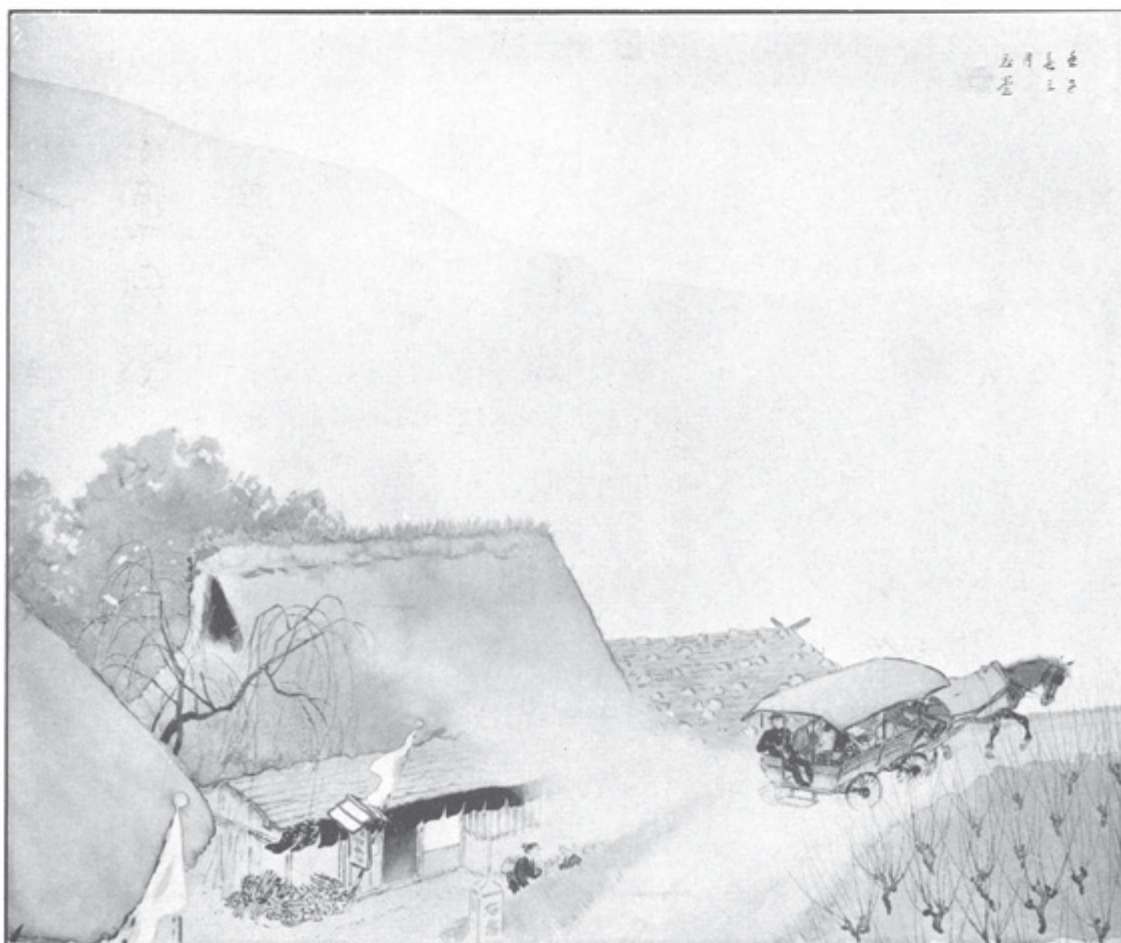
日本橋・三越にて

海幸



竹内栖鳳

祝捷日



川合正堂

『復刻版 旬刊美術新報』を推薦します

青木 茂（明治美術学会会長）

気に懸かったり・調べてみたくなる美術作品に遭遇した時に、同時代人の感情や思想を知るために、僕はそれを求めて雑誌を読む。雑誌といっても復刻本で、前後二・三年の何種かの文学雑誌の表紙と挿絵から編集後記までを読む。不二出版さんにも世話になる。『文藝』や『文庫』、『帝国大学新聞』や俳誌『層雲』などである。長い期間に亘る『層雲』などは、同時代の美術作品との精神的親近性に驚かされることがある。ありがたいことである。

不二出版では今度は『旬刊美術新報』の復刻版を刊行し、その解説は僕の古くからの友だち・飯野正仁さんだという。彼は一緒に上海を散歩していて『この街角には○○館というのがあって…あ、ここです…魯迅はここで○○○』というアメリカ映画を見ましたよ』などという、端倪すべからざる人物である。また、彼は十五年戦争下の日本の美術現象についての専門家で、多年の成果を『戦時下日本美術年表』という、実は月表を図版入りで二〇一三年に刊行した。パソコンを操作できない僕でも図書の形なら利用できる、いつも座右にある。『旬刊美術新報』などは隅々まで利用されている。

画壇ジャーナリストを戦時下も貫いた猪木卓爾さんが満身の愛情と発行の苦勞を注いだ同誌は、統制下の日本美術界の貴重な記録であるが、稀覯雑誌のゆえにその利用は困難だった。『旬刊美術新報』の復刻と、唯一無二の解説者を得たのを喜び、江湖に推薦する。

有意義なる『復刻版 旬刊美術新報』刊行

丹尾安典（早稲田大学教授）

「戦争と美術」にまつわる近年一番の研究成果は、『戦時下日本美術年表』（二〇一三年、藝華書院）だと云ってよろしかろう。その編者飯野正仁が、このたび覆刻される『旬刊美術新報』の資料提供者でもあり、解説執筆者にもなっている。この雑誌は「大東亜戦争期」の美術状況を詳細に伝えてくれる刊行物ではあるのだが、全巻を所蔵している機関がわずかだという理由によるものか、かならずしも十分に活用されてきたわけではない。そんな限定された閲覧現状を打開すべく、飯野と不二出版が手を組んで、この覆刻を実現させたのであらう。戦争と視覚イメージの連関を探究の研究には不可欠なこの基礎文献を、公立図書館や大学図書館にはぜひ架蔵してもらいたい。原本はしっかりとした製本もなされておらず、紙質はせいぜい中の下程度、つまりやぶれやすく、はがれやすく、複写禁止とするのが順当な資料だから、この覆刻版は原資料よりずっと閲覧の便に適しているし、編輯発行兼印刷人の猪木卓爾が終刊号の翌年に二冊だけ刊行した稀覯誌『日本画及工芸』の覆刻まで付録にそえてあると聞けば、手にとって存分にめくってみたい欲望に駆られる。先日『古本倶楽部』（二二八・二二九号）という中野書店在庫だよりの巻末に靄島互なる人が書いているところを読んだ。それによると、猪木は「卓爾」と「卓二」の両表記を併用しているそうで、『旬刊美術新報』のまえには『美術往来』、『日本美術新報』、『日本美術新聞』の刊行をてがけていたとのこと。古書通の興味を惹く出版人でもあったらしい。



37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	18	17	16	13	12	7	6	号		
院展・創元展	二科・青龍展	白衣勇士の美術	人を語る	印度古美術	庭園・茶室・水墨	レオナルド・ダ・ヴィンチ	日本新風景美	モネと印象派	白鳳の彫刻・油絵の技法	油絵と国民性	乾山忌に当りて	開国文化と南蛮美術	ボナール	メキシコ現代絵画	浦上玉堂	ブウルデル	来迎図	南方美術園	水彩画の問題	古代波斯の芸術	富岡鉄斎	大東亜戦争と美術を語る座談会	根津美術館列品	文展（洋画・彫刻）	文展（日本画・工芸）	特集

◎特集一覧

56	55		54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39			38	号				
ラファエロ	陸軍美術展	ゴッホ	独立美術展	コロー	明治絵画検討	ルドン	ルーベンス	南蘋派	アフリカ美術	ギユスタヴ・モロオ	ドラクロア	ボチチエルリ	ポンペイ壁画	大東亜戦記録画	ピカソと歌麿	大潮会展	美術と教育	文展新人号	文展号（日本画・工芸）	文展号（洋画・彫刻）	ミケランゼロの芸術	水彩画技法	ドガの芸術	満洲国慶祝展	一水会・新制作派	特集

76	75	74	73	72	71		70	69	68	67	66	65	64		63	62		61		60	59	58	57	号		
文展号	一水会・新制作派・作家協会展	ティチアノ	決戦美術展	第三十回院展	二科展号	構図の復活	青龍社展	誌上夏季美術講座（四）	誌上夏季美術講座（三）	誌上夏季美術講座（二）	誌上夏季美術講座（一）	海と山の画材	シャヴァンヌと桃山	デオットオと北宗画	現代仏印美術	建畠大夢遺作展	ヴェラスケス	大日美術院展	ゴッガン	栖鳳回顧展	フラゴナール	シヤルダン	ロダン	春の展覧会	クウルベール	特集

美術旬報

美術雑誌の

八種の題號決定

藝に報道した如く内務當局提
示の八種類の新聞雑誌に對し人
選決定し其の後各々の受持ち維
誌の題名等協議の結果、當局の
注意もあり全新聞名には提はれ
ず選定の結果、「國畫」齊田元二
郎、「新美術」太下正男、「國民
美術」岩佐新、「美術文化新聞」
佐久間三郎、「藝論」藤本三郎
「月刊美術」代表者石川三郎
然して本社には「旬刊美術新報」
と決定、月刊誌は創刊號を九月
十日以後とし、夫々關係官廳の
手續を急ぎつゝあり

二六〇〇年展

昨年東京美術會を卒業の同期
生より成る二六〇〇年會第三回
展は八月五日より十一日まで府
美術館に於て開催され力ある地
味な研究作を發表した、出品者
の顔ぶれは
本城正、大柳剛男、大澤正夫
乙葉統、小野田弘明、金子徳
衛、竹澤基、日田輝四郎、野
崎英男、博松正利、山尾平、
益田卯次、藤本東一、郡山
正、興和武、室河久、本居典
親、元田乾行、森井龍起、中
江泉諸氏
尙同展では昨年共同製作献納畫
を發表し、各方面の注目を惹い

たものである。

山南會展終る

故土田夢徳の山南藝々生より
結成された山南會第二回東京展
は八月六日より十一日まで府美
術館に開催された眞摯な研究的
態度と發刺たる意氣を示してゐた
出品者の顔ぶれは
稲田夢徳、原田美智恵、山力
富吉郎、築地徹三、千地秀弘
萩原通石、恩田耕作、高橋太
三郎、白林文子、丸岡比呂史
松山政春、松本晃光、小松均
小柳泰然、江龍徳等、木村揚
照、清水洵平、吹田草牧、岡
崎巴人
の諸氏であつた
尙同展は十月二十四日より二
十六日まで大體記念京都美術館
に於て京都展を開催することと
決定した

新發足の美術雑誌

第一回編輯會議

當局列席のもとに新體制下八
社の編輯部構成メンバーに成る
第一回編輯會議は、八月十一日
午前十一時九ノ内會館に於て開
かれた、今度の統制に當られた
内務省警保局企劃課瓜生事務官
佐伯保長、今後の指導に當られ
る内閣情報局鈴木中佐、素情報
官等の出席あり、午後の全なる瓜
生事務官から今後の健全なる經
営と選んだ八社の責任の重大な
點につき極めて謹嚴なる挨拶
あり鈴木中佐情報官よりは座談
の形で今回の統制は自分の考へ
てゐる高度國防國家態勢から見
ればまだ「手ぬるいもので、
美術人の覺醒の如何にも足りない
ことを近來に至つて愈々痛感
した。作家の情操はもつと健全
に高度でなければならぬ」と西歐

の獨逸、佛蘭西、伊太利に例を
ひき鑒なる世界的知識をもつ
て中佐一流の明快なる所論を吐
かれ、列席者の眞常の注意をひ
いた

泰情報官は實際的な立場から
これからの美術はもつと「生
活美術に力を注がねばならぬ。
そのためには今までの如くは違つた
地方民藝の創造育成などにも美
術家の傑れた人々の乗り出して
來られることを望み、或は美術
家常會なども全面的に擴大させ
大に時局的に進むやう、且つ今
後の美術雑誌は執筆者及びその
内容をよく検討し、情報局あた
りの意圖に反せざるやう協力を
政府の意圖に反せざるやう協力
を望む」とあり、最後佐伯保長
は決して選ばれた八社がどの
角度から見ても最適當のために
選んだ譯でなく、更に更に自願
發着の非常時局下の美術文化
指導に政府と聯絡をとり萬全を
期されたいと嚴肅なる挨拶があ
つた。ついで八社は日本美術維
誌協會を結成し、直ちに規約の
條文を練り、これを當局に具申
した上全美術界に發表すること
になつた

多摩帝美の圖案展

多摩帝國美術學校では八月二
十二日から二十六日迄銀座三越
七階ギャラリーで第六回圖案科
展を開催する、尙同展には本年
度卒業製作を特列する筈

商業産業美術展

産業美術の振興を目指す第十
回新商業美術展並に日本産業美
術協會第一回産業美術作品發表
展は八月十二日から十七日迄日
本橋區白木屋五階で開催、新商
業美術展には商工大臣賞の楠草
篤氏以下入賞作品廿四點選外佳

作品六十五點、産業美術展には
日本産業美術協會會員作品四十六
點、會員作品六點を展覧し連日
盛況であつた

廿七日から 青龍展開く

來る二十七日から九月七日ま
で、日本橋三越本店五階で堂々
と純在野公衆展を開催する青龍
社では十八日鑑別を前にして搬
入關係を願慮し殊に地方出品に

社告

兼ねて報道した如く當局の
美術新聞雑誌の統制成り小
社は提示された八種類の中
旬刊誌として綜合報道に任
ずると共に新しき國防美術
文化の建設に與へられたる
使命を完ふせんがために掲
題の「旬刊美術新報」とし
て見らるゝ如き發刺たる陣
容の下に表材の不足勝ちを
克服して發足することにな
つた。何卒來より一層
の御清授を祈る次第である
日本美術新報社

就て痛心し主宰川端龍子氏は
「時節柄東京市内ではトラツ
クが心配の種で運搬が八釜し
料金が高率になるし結局作
家は手車を曳いて作品を搬入
する時代が來たわけである、
現に私の手許へ大阪からかう
いふ手紙が來た。大阪郊外の
或る出品者であるが梅田まで
四里の道を手車で作品を運ん
でいつた、それは十日のこと
で十七日の締切日までに會場
へ届くかどうかと譯員に云は
れ心配してゐると云ふのだ。
こんな状態であるから締切日

に作品が一應揃ふかどうか
疑問視される、そこで官展で
無い吾々としては御常運に對
する諷刺もあるから締切の餘
儀ない事情は多少考慮したい
と思ふが、開會まで僅かの間
に目錄の編成といふこともあ
るし主催者の立場としては聊
か心配である」
と語つてゐたが十八日の鑑別當
日の出品總數は八十五點、入選
三十三點、昨年の出品總數百十
數點に較べると今年は約二十點
減で川端氏は鑑査場で左の如く
語つた

「今回の出品は輸送費が嵩む
などの理由でヒヤカシが減り
總じて非常に眞摯になつたと
云ふ事が出来る、又手輕な鳥
渡したものを自分で運んで來
て總評を猛ふ連中は全然消滅
した、超非常時が青年畫家に
どんな影響を與へてゐるかは
よく解らないが、兎に角鑑査
に當つた者に取て落選すること
が解り切つた未熟な作品の
見當らない事は鑑別の手數が
省ける、しかし一面にさう云
つた未熟の作品の中から將來
希望のものが期待されるわけ
で成熟せざる作品が見當らな
いのは喜ぶべきことでない、
又青龍社の入選標準を知つて
の不出品か、或は元氣消耗に
依る不出品か、さういふ疑問
は展覽會をやる者に取つて大
いに考へさせられることだ、
今回は數の上で關西方面の畫
家の進出が著しいのは畫壇に
何らかの示唆を爲すものであ
るまいか云々」
尙は從來國外に構圖を求め例の
太平洋四連作や大陸四連作を完
成した後であるからその作意
圖が注目されてゐたが、今回展
には「國に寄する」連作の「伊
豆の風景」を取扱つた「伊

◇覽展會の曆

日	月	火	水	木	金	土
24	25	26	27	28	29	30
31						

- △青龍社第十三回展
八月廿七日より九月七日迄三
越
- △日本美術院第二十八回展
九月一日から同二十日迄府美
術館
- △二科會第廿八回展
九月一日より廿一日迄東京府
美術館
- △國風影燈第五回展
九月一日より十七日迄東京府
美術館
- △新浪漫派第三回展
九月一日より四日迄菊屋ギヤ
ラリー
- △三浦竹軒竹泉陶藝展
九月三日より六日まで高島屋
△春藝展 九月三日より七日ま
で青樹社
- △武田龍芳南洋作品展
九月六日より十日迄銀座紀伊
國屋
- △宮崎豐作展
九月六日より八日迄菊屋ギヤ
ラリー
- △佛印巡迴日本畫展
九月九日より十日迄三越本店
- △大森桃太郎個展
九月九日より十三日迄青樹社
- △朋友會洋畫展
九月十日より十四日迄菊屋ギ
ヤラリー

我々が新文化建設の重任を擔ふ人々



情報局第五部第三課長上田俊次中佐
我が國文化の新體制はすべて課長の肩に擔はれる。美術、文藝、映畫各々然り今昔榮華など新聞紙上を賑はしてゐる。

美術雑誌新體制
八月十一日九ノ内會館で八社の編輯者又は理事者と政府當局との聯絡編輯會議が開かれ、これより各美術雑誌の新體制は初められたのである。寫眞は風生事務官が一場の訓示を述べられてゐるところである。(中央官報の立てるが情報局會館で開かれた)



情報局第二部第二課情報官鈴木康三中佐
高度國防國家建設に日となく夜となく非凡の精力を傾注されてゐる。殊に文化面の再編成には常に自ら奮然と努力が拂はれてゐる。この六ヶしいお聞からも時々語弊も出れば何れも聞かれます。



官報情報一審議三第部五第局報情



これからの我が國新文化の發展本部である情報局の中でもわれ等と最も深い接觸を持つ第三課にあつて高邁なる理想と見るからの精力を以て今後の指導に當られる、本紙新發展に當り第一號を飾るため特に稿を寄せられた。執筆せられた。

官任主制統帥部伯位 課制金局保警
成てつよに家想理局當れら當に制統帥部南英の度今に共と氏川米を録本の會社には前の氏すせ見々國の些は度應るな嚴謹、たれさで制統帥部鑑映に殊、いたが打値り強固も長々駐各るす任て以るあで名有てしと人評、たれらめ認を腕手の凡非は



美術 經濟 濟

油繪具の配給

美術家聯盟が猛運動

七月三日最後の基礎案協議終る

油彩の日本の大變革期

洋畫作家の統
合集團である美
術家聯盟では、
七月三日午後五時から、豫て討
議研究をつづけて來てゐた油繪
具の配給についての調査及び協
議會を開催した。大體これが基
礎案の最後の會議と見られ、
秋のシーズンを迎えて意々實施
の活動に入る模様である。當夜
は東京の文房堂、大阪のレイト
ン瀨本を始め東西油繪具製造業
者を招致し、聯盟側からは、木
村莊八、石井柏亭、太田三郎、
其他同研究委員出席した。

來るものと見られ、同時に差當
つて必要なアトリエ用石炭の間
題も併行して配給手續が出来
る倍である。

某業者談 油繪具で第一に
必要に迫られてゐるのは、ホ
ワイトですが、これは鉛が主
材なのでその製造數量に少
らぬ困難があり、次に必要な
コバルトは獨得のコバルト礦

から取るもので、これはまた國
産であり、他の代用品といふ
わけに行かぬのです。油繪具
の不足から、油彩の上にも日
本的一大短革機が来るのでは
ないかと思ひます云々。

七月中に出荷し始める

日本畫の紙の配給

日本畫製作資材統制協會第二次運動

日本方面では既に統制資材
團體が成立し、繪絹の配給に
ついて、新に紙の配給とい
ふ二段階に猛進して居り、形
態側は資材及びモデルアトリ
エ用の石炭の配給等實績を舉
げてゐるのに

繪絹は配給が進んで行く、次
に來るべき製作資材の紙は、頗
る重大且つ困難な位置に置かれ
てゐるのである。さらでたに絹
本の困難は、日本畫本來の表現
によしとせられた紙に傾き移ら
うとしつゝある。幸にも紙は繪
自由製造であつて制限はされて
居ない、しかし、時局下職人不
足、その他の理由で量に於ては
ひどく減少されて居り、昭和十
六年度は平年の三割位しか製造
されず、十七年度は殆ど製造が

油繪具等の配給は、美術家聯
盟が取り行ふものでなく、同聯
盟を基礎にする配給機關が出
る。

旬報

大東亞美術協會創立

會長に有馬伯、副會長に菊地中將

八月七日正午から日比谷三信ビル八階で大東亞美術協會創立披露會が開催された。同協
會關係者一同の外、陸海兩省、外務省及び關係官廳の當事者、都下各新聞並に美術雜誌記
者等參集、會長に有馬伯、副會長に陸軍中將菊地門也氏を推薦、
常任理事に小城基、峰岸義一兩氏、理事に仲田定之助、山口文象兩氏、庶務部長に旭泰
宏氏を夫々決定

有馬會長から創立趣旨の披露並に挨拶、菊地副會長の挨拶あり、午餐後、小城常任理事
から事務報告、各官廳出席者よりの祝辭及び希望意見が交々陳陳された。

遠大な目的と事業

同協會の目的は、大東亞共榮
の精華たる傳統的特質を共榮國
諸國に紹介し、該諸國の美術、
工藝を我國に招來し、共榮國の
美術人に年一回東京で開
催する諸民族協和の美術
展覽會に出品させ、右展
覽會を共榮國諸國主要都
市で交互に開催し之れを
機會として相互の認識を
高め、こゝに大東亞新文
化園を建設し、翼賛の誠
を期するに在る。

治一
め南方との交歓を遂

共榮 國美術の病院、學校、
研究所等へ參考と慰安
を兼ねた寄贈又は貸與、共榮國
關係展への協力、同關係美術と
文化方面の出版、共榮國人に美
術する機會を造り研究所を開設
し、生活を向上させる美術など
が企劃されてゐる。

第二回忠愛展

授賞と院友推舉



大東亞美術協會創立發會式の光景
右列右より菊地中將、その左一有馬伯(記事參照)

組織 文化人とし美術
學者、美術批評家、美術
史家、美術家、工藝家、
建築家、寫眞家等を會員
とし、會長、副會長の外
顧問、贊助員、理事、書
る。

旬刊美術新報

「復刻版」全6巻・付録1・別冊1

◎ 体 裁ⅡA4判(第1～6巻)・B5判(付録)／上製／総2、758頁

◎ 別 冊Ⅱ解説・目録(飯野正仁 編・解説)

(別冊のみ分売可Ⅱ本体2、000円＋税 ISBN978-4-8350-8031-4)

◎ 推 薦Ⅱ青木 茂・丹尾安典

◎ 原本提供Ⅱ飯野正仁・東京文化財研究所

◎ 揃定価Ⅱ本体170、000円＋税

◎ 配本概要

第2回配本				第1回配本				配本
付録	第6巻	第5巻	第4巻	別冊	第3巻	第2巻	第1巻	復刻版 巻数
『戦時記録版 日本画及工芸』第一輯・第二輯 (1944年2月・9月)	第63号～第76号 (1943年6月～10月)	第49号～第62号 (1943年1月～6月)	第37号～第48号 (1942年9月～43年1月)	解説・目録	第25号～第36号 (1942年5月～9月)	第13号～第24号 (1942年1月～5月)	第1号～第12号 (1941年8月～42年1月)	収録号
本体95,000円＋税 ISBN978-4-8350-8026-0 2017年11月刊行				本体75,000円＋税 ISBN978-4-8350-8021-5 2017年5月刊行				価格・ ISBN

関連図書

日本民藝協会発行「一九三九年～一九四六年刊」

月刊民藝・民藝 全12巻・別冊1

別冊Ⅱ解説(水尾比呂志・尾久彰三・杉山享司・

村上豊隆・白土慎太郎)・総目次・索引

体裁ⅡA5判・上製・総4、930頁

推薦Ⅱ大城立裕・鶴見俊輔・水尾比呂志

定価Ⅱ本体180、000円＋税

『月刊民藝』は、日本民藝協会の機関誌として、

一九三九年四月に創刊、一九四二年一月から『民藝』と改称されて一九四六年七月発行の第七〇号まで刊行された。ただし、第六九号は未見である。本資料によつて、世界の生活文化史上稀有な事跡と考えられるべき民藝運動の、戦時下の実情を知る場を拡げるとともに、それを現在の生活文化に照応させて在り様在り方を検証するよすがともなり得るだろう。

日本民藝協会ほか発行「一九三一年～一九五一年刊」

工 藝 DVD-ROM電子版

構成ⅡDVD-ROM全3枚・検索システムCD1

枚・別冊1

別冊Ⅱ解説(水尾比呂志)・総目次・索引

推薦Ⅱ大原謙一郎・鶴見俊輔

定価Ⅱ本体280、000円＋税

本誌は、民藝研究の創始者・柳宗悦が監修し、ほぼすべての編輯に携わった、民藝分野の啓蒙的研究誌である。各号ごとに主題を定め、挿絵や写真のみならず、漆や手織物といった実物を貼り込むなど、戦前から戦後を通じて、民藝運動の理論と実践の場となった。全一二〇冊、総約一万四千頁に及ぶ、雑誌『工藝』の全貌がDVDによりオールカラーでよみがえる。号数、発行年月日からの検索だけでなく、主題・標題・執筆者・挿絵からの詳細なキーワード検索機能も付加した。

表示価格はすべて税別

不二出版

〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシミリ03-3812-4464
振替00160294084